

■ 第13回 通常総会を終えて

総務委員会 委員長 松澤 敏高

今回の第13回通常総会は今年の新年交流と同じく全国町村会館で平成19年5月25日に開催しました。

坂本理事の司会により定刻の16時30分に始まりました。まず総会の成立については濱専務理事から会則 第4章 第27条2号により正会員347名の十分の一を足りる報告を、次に浦会長の挨拶に続き議長等の選出に移りました。立候補者無く議長は会長が松澤理事を、書記、議事録署名人は議長が佐藤勉・田中・寺本・高島各理事を推進し承認を得、審議事項に移りました。第一号議案から第5号議案までの活動報告・活動計画を志村・霜野副会長、予算関係は濱専務理事が行いそれぞれの審議事項は質疑等も無く賛成多数で承認を頂きました。最後に報告事項の報告を行い17時30分全ての審議を終了しました。

通常総会も終わり18時から内田智史デザイン事務所の内田智史氏をお招きし、照明についての記念講演会をそして19時20分から場所を移しての交流会、(財)建築技術教育普及センターの安藤次長らをお招きし総参加107名での歓談は時間が経つのも早いものです。予定を少しオーバー、9時に閉会となりました。出席の会員の皆様のご支援・協力を感謝申し上げます。

無事今年も通常総会が終わりましたが、気になることが在ります。正会員数が第三回総会時の683名をピークに年々

減少傾向が進み11年後の今回の報告では347名と336名が協会を去りました。総会員数の見ると同じく第三回総会の777名社から今年496名社と281名社減少しています。そこで会員の皆様方の隣人で協会に関心のある方へ是非入会を勧めて頂きたくお願いいたします。今年から07年団塊の世代退が始まりました。協会にとって不安要因にならないかと願っております。

ところで開催会場に関して振り返れば、第一回開催の東京デザインセンターから始まりそして、東京都庭園美術館での第十回記念総会より東京デザインセンターを離れての開催となりました。第12回総会までの開催の準備には多くの会員の皆様の協力と時間を頂きました。今回は総会と交流会を全国町村会館の会議と宴会のセットを利用しました。そのため、会場の設営、移動また飲食のメニュー、装飾等、今までの分離発注から全てを会館側へお願いすることから、大幅に関与人員と時間の省力化を進めることができました。第一回当時を準備したものから見れば、準備担当会員の負担軽減は大変進歩したと思います。

最後に総会・記念講演会・交流会に尽力いただきました各担当の会員の皆様にまた当日に受付業務をお手伝い頂きました法人会員の皆様、誠に有り難うございました。

■ 知ってですか！

Thailandにオオタ・テクノ・パークと言う大田区の企業だけが入居できる町があります。バンコクから西北に車で1時間程のナコーンの町にあるそうで、大田区より広い敷地だそうで、Thailandでは大田区というのはブランド名になっているそうです。

先日右肩が2ミリほど違う枠を金メッキで作りたいと、知り合の工場に頼んだのだが、金メッキをするとその部分が変形して見えるのでどうしても出来ないと言う。たまたま私が通っている所が大田区六郷なので、近くの工場に事情を話すと「金メッキなら鉄だよ、アルミはダメだ、あさって取りにきな」と。屋上から凶面を紙飛行機にして飛ばすと地面に着くまでに品物ができ上がるのが大田区だと比喻されていたのを思い出した。そんな訳で今回は大田区を歩いて見ました。

従業員数9人以下のチョウ中小零細企業の町で機械金属工業が80%以上をしめ、多種多様な技術の集積と企業間のネットワークを活かし、高性能で総合的な加工技術で短納期に対応できるのは、日本の先端的な高度技術を支える町であることは間違いない。その短納期に対応出来る要因は工場が家族的であり職住が一致していることが大きい。また個々の企業が専門的に特化した技術・技能を持っていて、設計指示だけでは出来ない加工を、いとも簡単にやってのける経験を持っていて、製品開発にかかわる試作品の制作は最も得意とし、それをオクビにも出さない職人たちがいる町である。大正始めから京浜工業地帯の輪郭が形成され始め、関東大震災の後、工業地域に指定されると躍進の一途をたどり、昭和19年の大森の意見書の中で、当時の大森・蒲田を「軍需生産工場ノ飛躍的增加拡張二伴ヒ今や兵器廠的地域タルノ威観ヲ呈スル」と



六郷工科

述べている。この兵器廠的地域のツケは非常に甚大で、第二次世界大戦では、19回の空襲でほとんど破壊されてしまった。昭和20年の初めの人口は198,000人だったのが、9月には48,000人に激減してしまった。

さて現在とはいうと、少子高齢化による労働力不足に対応するため、地域における人材育成も大切で、平成16年に開校した都立六郷工科高校は、日本初の「デュアルシステム」つまり企業現場で訓練した時間を、成績の単位として認める新しいシステムの高校で、職業訓練をしてくれた企業や、そこで学んだ技術や技能を継承する学生が今年初めて卒業した。また「太田少年少女発明クラブ」も2年前に設立され、子供たちが物づくりの楽しさを体験学習し将来、産業界を担う人材を育てる事を目的としています。 井上 常雄

■ 第25回法人会インフォメーションの会

去る6月26日（火）に東京ミッドタウンに於いて、第25回法人会員インフォメーションの会 テーマ：『東京ミッドタウンとワイス・ワイスのこだわり』を開催致しました。

平日、朝9時から13時の企画にも関わらず、51名（正会員13名、一般6名、法人会員32名）のご参加を頂きました。御連絡後2日で飽和状態になり人気の高さを通観致しました。レストラン「Botanica」の席数の関係上ご参加をご辛抱頂いた方々には誠に申し訳ありません。

本企画は東京ミッドタウン商業棟ガレリア3Fに出店されたワイス・ワイスの佐藤代表と東京ミッドタウンマネージメント（株）タウンマネジメント部運営グループ統括明石様のご尽力に依り実現致しました。

当日、東京ミッドタウンタワーのインフォメーション横にて参加者の確認をさせて頂き、QRコードの入退カードを受取り、22Fギャラリー受付にて申込を済ませ、東京ミッドタウン概要説明室に案内されました。9時30分より本会が開催され、会員交流委員会 佐藤勝委員長、法人会員の会 富田代表幹事の御挨拶、タウンマネジメント部運営グループ統括 明石様より施設全体のコンセプトである、おもてなし心（ビデオと模型に依る）の説明がありました。その後、商業棟ガレリア3Fに移動し、ワイス・ワイスのこだわりについて佐藤代表が説明（1000点の品揃えのご苦労話、素材を活かし伝統と新しい技法・美意識に依る暮らしの道具・会社紹介等）されました。

因みに、本敷地は元毛利家江戸下屋敷で有り、東京防衛施設局の跡地を（株）三井不動産がデベロッパーとして施設計画を進められました。

エリア（31ha）はミッドタウンタワーを中芯に出入口を出ますと前に広がるダイナミックなガラスの天井（全て現場実測後ガラスをカットにて施工）があるプラザ。左側にミッドタウンイースト。右側にミッドタウンウェスト、その横に商業棟ガレリアを併設、他ザ・リッツカールトン東京、サントリー美術



WISE WISE tools 前で

館、安藤忠雄が設計した21_21DESIGN SIGHT

アートではプラザ中央に置かれた安田侃（作）ブロンズの造形（妙夢）・公園にはフロリアン、クラールの作品で高さ6mの巨大不思議建造物等、檜町公園の緑（サクラ・クスノキ等140本の樹木を旧防衛庁跡地から移植）と洗練された都市空間（和と洋）・アートと文化の融合を実現。我々はガーデンハウスの最上階のBotanicaにて昼食を頂いた後、A班（ミッドタウンツアー）商業空間ガレリア・プラザ・庭園等を満喫・B班（アートツアー）ナビゲートによる日本初のアートツアーが実現、ユビキタスコミュニケーターが作品までのルートをナビゲートし作品前（20作品設置）では作家紹介、映像で製作風景まで見学できました。携帯器具等返却後三々五々解散致しました。午前中での開催で少し冒険を致しましたが人気の高さに助けられました。

行き届かない所が多々有ったかと思いますがお許し頂きます様宜しくお願い申し上げます。

次回のインフォメーションの会で発表したい方申込みお待ちしております。WG-4一同。

■ 七夕飾り

奈良時代の頃は宮廷行事でした梶（かじ）の葉に金の針を7本通し、また別に七つの孔をあけて五色の糸をより合わせてそれに通し、庭に椅子を置いて和琴を立てかけ、天皇が「二星会合」をご覧になり、公卿に宴を賜わったのが始めの形であると伝えられます。それが、次第に、日本の七夕信仰と複合されて行きます。



梶の葉と赤

今日のような七夕祭は、江戸時代に入って五節供の一つとされてから、全国的に行われるようになりました。竹飾りも飾られるようになり、始めは五色の願いの糸を垂らすだけだったのが、元禄頃から短冊をさげ、吹流しをつけるようになってきました。また、将軍家で行われた七夕は、城中に二本の笹のついた竹を立て、五色の糸を張りわたし、色紙、短冊、梶の葉に自作の歌や古歌を書いてつるしました。色紙、短冊、梶の葉に歌を書くことは学芸、書道上達の願いがこめられてありました。

また、庭前には一対の祭壇が設けられ、それに9本の灯りを立て、二脚の卓上に野菜、魚類、果実を供え、その前に楽器、香華、蓮の葉を置き、笹の葉のついた竹に五色の糸をかけました。また、その下に蒔絵（まきえ）の盤に水をなみなみと注ぎ、梶の葉を浮かべ、それに天の二つの星をうつして祈りました。この時、笹竹にかけられる五色の糸は「願いの糸」と呼ばれて、この糸をかけて二つの星に祈ると、その願い事が三年の間に必ずかなうといわれていました。

葉竹は稲とともに本来熱帯植物だったところに意味があり、正月の門松と同じく、神の降臨のよりどころを示すものです。

短冊は四手（しで。神事のしめなわに垂れ下げる紙）の変化したものとされます。

なぜ「七夕＝たなばた」と読むのか？幼い頃、短冊に何を書きましたか？日本では七夕は稲の開花期にあたり、水害や病害などが心配な時期です。また、お盆（旧暦の7月15日）の準備をする頃にもあたります。そこで、収穫の無事を祈り、棚機女（たなばたつめ）という巫女が水辺の棚の上に設けられた機屋で棚機（たなばた）と呼ばれる機織り機を使って先祖に捧げる衣を織りあげ、それを祀って神の降臨を待つという禊（みそぎ）の行事があったそうです。棚には神聖なものを一段上げるという意味があります。やがてこの行事と乞巧奠が交じり合い現在ののような形に定着していきますが、もともとは7月7日の夕方を表して七夕（しちせき）と呼ばれていたものが、棚機（たなばた）にちなんで七夕（たなばた）という読み方になっていったのです。

七夕には笹に願い事を書いた短冊（五色＝青・赤・黄・白・黒）を飾りますが、本来はサトイモの葉に溜まった夜露を集めて墨をすり、その墨で文字を綴って手習い事の上達を願います。サトイモの葉は神からさずかった天の水を受ける傘の役目をしていたと考えられているため、その水で墨をすると文字も上達するのです。ちなみに、笹に短冊を飾るようになったのは江戸時代になってからのこととして、昔は梶の葉（写真参照）に和歌をしたためて祀っていました。梶の葉の裏側は細くて滑らかな毛がたくさん生えているため墨の乗りがよく、紙の原料としても使われていたのです。宮中行事を伝承する京都の冷泉家では、今でも古式ゆかしい七夕の歌会や乞巧奠がとり行われており、梶の葉が重要な役割を果たしています。

七夕の由来には、織姫と彦星の恋物語だけでなく、手技（機織・手芸・習字など）の上達や豊作の願いが織り込まれています。そんな話に思いを馳せながら七夕を過ごしてみたいかがでしょうか。

■ 「IPプロデュース施設見学会」(平成19年6月4日開催) 報告



事業委員会WGメンバー

「黄色い彫刻は何故設置されたか？」という興味深い内容に加えて、お洒落なエレメントバーでドリンク付見学会とあって、アートとお酒が同じくらい好きな私にとっては、いつもより断然気合の入った参加になりました。

セミナー当日、虎ノ門タワーズに入るシンプルでモダンな細い通路を抜けると、吹き抜けのゆったりとした空間が広がり、日の光を浴びてきらきらと輝く「黄色い彫刻」が現れました。なんて綺麗で幸せそうな彫刻！・・・これが私の最初の印象でした。ひらひらと飛ぶ蝶々のもようでもあり、風に揺れる花のもようでもあり、3つの彫刻が楽しくおしゃべりしているようにも、ダンスしているようにも見えます。さてさてこの彫刻は何故この場所選ばれたのか、どうしてこの色になったのかがこのセミナーで明らかになる！とワクワクしたのは、私だけではなかったと思います。

セミナー前半は、株式会社イリアのアートプロデューサー梶屋氏による彫刻コンクールの経緯の説明でした。以下にその概略をご説明します。

海外を含め、470名の登録の中から、まず354名、そして1次審査で30名、そして造形提案書、平面図、立面図、完成イメージスケッチを基に2次審査で10名に絞られました。2次審査での評価のポイントは、

- 1) 「虎ノ門タワーズ」という建築空間に作品が調和しているか
- 2) 作品がその作家にとって今まで以上に発展性があるか
- 3) 作品に高い精神性が表現されているか
- 4) 新しい感覚で時代の先取りがされているか

が中心となり、選ばれた10名から提案された作品マケットを対象に行われました。

良いけど古い・・・、力強すぎる・・・、アメリカ的・・・、何かに似ている・・・等上記以外にも選定に際しては色々な角度から審査され、かなり困難を極めたようです。

最終的に、静かな建築に少し動きのある軽やかな楽しいものをということで小笠原伸行さんの「三つの響きあうかたち」が大賞に選ばれたということですが、今回のセミナーではその経緯が詳しく説明され、その審査の難しさを垣間見たような気分になりました。セミナー後半は、梶屋氏と小笠原伸行さんとのトークセッションとなりました。当初、ステンレスの素材その

のままの色か茶色等の無難な色を考えていらっしゃった小笠原さんですが、審査員の先生方から明るい色を、という依頼があり赤・青・白・・・と実に色々な色を考えられたそうです。青は空の色なので映えない、空間はモノトーンなので白も難しい、赤は激しすぎる・・・と色を消去していくと黄色しか残らなかったそうです。

黄色とひとこと言ってもさまざまな黄色がありますが、検討を重ねた結果、レモンイエローに少し白を加えた華やかな色に決定されたそうです。もし、彫刻が茶色で出来上がっていたら、私の目には、蝶々やお花ではなく、犬やゴリラに見えていたのかもしれない・・・。色だけでなく、導線を考えて向きを変えたり、空間とのバランスを見て全体を小さくしたり・・・都市空間にアートを置くということ、その空間の持っている質とアートとのバランスを考えるのは、いかに難しく面白いものかということを経験して学びました。

最後に、美味しいお酒とおつまみ、立派な「作品集」までいただき、とても楽しくセミナーに参加できましたことに感謝致します。特に彫刻を見ながらお酒が飲めたのが最高でした。

(中尾仁子)



ガラス窓に映る彫刻

■ アカンサスの花が咲きました

アカンサス	キツネノマゴ科 Acanthus mollis
和名：ハアザミ	
性状：常緑多年草	
原産地：地中海沿岸	
<p>特徴など：この仲間は明治のころに日本に渡来しました。初夏ごろに白～淡紅色の花を穂状につけます。(写真参照) 古代ギリシャやローマのコリント式やコンポジット式建築での柱頭の装飾に使われている紋様はアカンサスの仲間のひとつであるトゲハアザミ(A. spinosus)の葉をモチーフにしています。</p>	



アカンサス

とげ

ワインボトルを置きました。
(大きさを比較してください)

■ 編集後記

大田区の町工場夫婦で働いておられる小出製作所にお邪魔し、お話を聞いていると近所の方が自分の所で作ったおかずだよ！と差し入れがあった。ご相伴にあずかったタケノコは美味しかった。工場とご近所は通常は犬猿のはず。

情報委員 編集長 井上